

摂津・河内地方における大念仏上人と挽道場

神 崎 寿 弘

はじめに

戦国期の摂津・河内地方には、在俗の上人を中心とする大念仏の講集団が存在した。

順興寺実従の日記『私心記』天文十一年（一五四二）九月二十六日条に、

平野ニネリ供養トテ、大念仏上人シ候。見物ニ行申候ヘバ、ハラ候間、路ヨリ帰申也。^{（續）}

と記載されていることより、摂津平野における大念仏上人による練供養が、見物人がある評判の行事であったこと。

また、豊国神社の社僧であった神龍院梵舜の日記『舜旧記』慶長十二年（一六〇七）閏四月四日条の、

大原之阿弥陀^ニ、河内国之上人、大念佛執行^{云々}、

との記載より、河内国の上人が、大原勝林院において大念仏を執行していることから、良忍の融通念仏が、摂津・河内地方において盛んであったことが窺うことができる。^{（一）}しかし、摂津・河内地方に展開した大念仏宗については、近世融通念仏宗の寺院を中心に市町村史においても言及されているが、史料の制約もあって、その組織と活動の実態を論じる研究は皆無である。

ところで、最近、平祐史・西本幸嗣両氏により、戦国期に大念仏の講集団が存在した浜村源光寺の文書・古記録が翻刻紹介された。また、塩野芳夫氏・大澤研一氏により平野大念仏寺、行昭一郎氏により佐太来迎寺の文書が翻

刻紹介されている。⁽²⁾ 本稿、第一章の上人と挽道場では、これらの寺院文書において戦国期に在俗の講集団が存在した各寺院が、いずれも法明を中興とすること、また、在俗の人の中から圖により「上人」を選出し、その選出された「上人」の在所が「挽道場」となり、独特な組織により運営されいることについて検討したい。また、第二章「融通念仏宗」の成立では、平野大念仏寺における在俗の講集団から一宗確立への展開を、融観大通の活動を中心に検討することにした。

第一章 上人と挽道場

一 平野大念仏寺

平野大念仏寺には、延宝五年（一六七七）に、当時の上人であつた覚意良観（第四十五世）が大坂町奉行所に提出した『大念仏寺四十五代記録^并末寺帳³』が伝来する。本書は「融通大念仏記録」と題して、巻末に、

右平野庄大念仏寺之記録^并六別時之次第、其外末寺吟味仕、書上候、

と記しているように、良忍から相承されてきた四十五代の「上人」の出身地や在世期間などの記録、「六別時」の由来、また、末寺（末末寺を含む）四百六ヶ寺の沿革などを書き連ねている。

◇開山良忍上人と中興法明上人

平野大念仏寺の「開山」は良忍上人である。大原山に隠棲、自力念仏を修行していた良忍は、大治二年（一一二七）に「融通念仏」を感得する。⁽⁴⁾ 良忍が長承元年（一一三二）二月朔日に入滅すると融通念仏は、「良忍附法伝受弟子」である良感明応へと伝えられ、以後「上人」となった弟子達によって相承されたが、第六世の護阿良鎮が

「自力之為專行業」したため衰退し、中絶を余儀なくされる。

百四十年の中絶の後、「大念仏」を中興したのが、摂津国東成郡深江村の法明であり、

請取靈宝、嗣良忍上人法、可為大念仏上人、

との石清水八幡大菩薩の神託を受け、靈宝と良忍上人の教えを相続し、元亨元年（一二三二）から貞和五年（一二四九）六月十三日に寂するまで、「大念仏上人」（第七世）を継承したとされる。^⑤

その後、摂津・河内地方には、法明に帰依した檀那共が、六別時（下・八尾・高安・石川・錦部・十ヶ郷）と呼ばれる在俗の講集団を形成し、「上人」は、法明の遺言に基づき、六別時講中二百四十八名の中から選出されるようになる。^⑥

◇大念仏上人選出と浄土宗長老

その選出方法は、良忍から六代までの弟子へと伝授された相承とは異なる、他に類を見ない独特の方法で、

右大念仏住職者、中興法明上人帰依之檀那、六別時講中之内、一別時宛内御願取当之者、從六別時一人宛立合、於本山如来前、御札鬺揚、六人之内御願取当之者、為上人之旨、

六別時講中の内、一別時ずつ鬺によって選ばれた人物（在俗）が、六別時から一人ずつ立ち合い、本山の如来前において、再び札鬺をあげ、取り当てた者を「上人」^⑦（大念仏住職）」とするというものである。法明の次代上人である修観興善（第八世）は、この方法で選出されており、以後、第四十五世まで続けられた。

在俗・無智の人物が「住持」となるのであるから、別に僧侶を必要とした。

寺役勤行法事等者、浄土宗之僧侶大念仏帰依之長老、一人者一臆調声役、一人者二臆說法勸化役、但長老者、三代以前從舜空上人代以來相始、平僧六人、以上八人、日夜六時勤行無懈怠相勤、其外僧、不斷念仏如先住相

勤畢、

良惠舜空（第四十三世）代より、寺役・勤行・法事等は、浄土宗の僧侶で大念仏に帰依した二人の長老を調声役（法会などを勤める際の導師役）・説法勸化役とし、平僧六人を含む八人が、日夜六時勤行を懈怠なく勤めるとともに、その他の僧によつて不断念仏が勤められていた。^⑦

なお、上人選出については、「如来之白札」を入れた七枚の鬮で上人が決められたとも記している。その方法は、まず、調声役の僧侶が、「大神宮」の御幣にて祓い鬮を取りあげ、もし白札にあがれば、各別時から候補を改めて選び直し、新しい六人と白札でもう一度選出し直すというものである。^⑧

◇挽道場と六別時辻本

「大念仏寺」は、選出された上人の在所へその都度道場が移転する「挽道場」という形態をとっていたが、

此上人代迄、大念仏寺之堂、代々上人在処挽道場也、元和元^{乙卯}平野庄御代官末吉孫左衛門殿寺地申請、摂州平野庄堂建立、以後不移他地、但寺地年貢在、

と見えることより、平野庄代官であつた末吉孫左衛門より寺地を申し請け、元和元年（一六一五）に現在地である摂津国平野庄に大念仏寺が建立され、以後、挽道場が廃止されたことがわかる。^⑨

この平野大念仏寺と同様の形態が、六別時の「辻本」と呼ばれる六つの中心道場にも存在し、いずれの別時も「住持」については、各別時の講員中より鬮を取り当てたものが勤めていて、挽道場を行っていた。また、下別時辻本法明寺では、法明上人より寺号を許されたと伝えており、この他の辻本（八尾別時良明寺・高安別時高安寺・石川別時大念寺・錦部別時極楽寺・十ヶ郷別時来迎寺）も同様に法明上人を開山と仰いでいる。

大念仏寺の堂舎が建立された後、錦部別時は寛永十九年（一六四二）古野村（現大阪府富田林市）に、十ヶ郷別

時は承応元年（一六五二）、領主高木正次より寺地を貰い請け丹南村（現大阪府松原市）に、八尾別時は寛文二年（一六六二）舜空より寺号を受け平野庄馬場町（大阪市平野区平野上町）にそれぞれ堂舎を建立している。堂舎建立後はその地に定着することになったが、この新建立の堂舎は旧来どおり「辻本」とよばれ、住持も引き続き鬩取りで選出された。^⑩

ちなみに『大念仏寺四十五代記録并末寺帳』が制作された当時の各別時講中の構成人数は、下別時が二十三名（摂津国東生郡八名・河内国渋川郡六名・同国茨田郡二名・同国若江郡七名）、八尾別時が二十二名（摂津国東生郡七名・同国住吉郡一名・大和国平群郡十四名）、錦部別時は記載無し、十ヶ郷別時が五十八名（丹南郡三十名・八上郡二十三名・丹北郡五名）、石川別時が二十五名（合計人数のみ）、高安別時が十九名（合計人数のみ）であった。^⑪

◇石川別時

石川別時に関しては、住持選出について、他の別時との差異が見られたため、当別時の中心道場（辻本）であった大念寺（大阪府南河内郡河南町大ヶ塚）に伝わる『紫雲山歴代録』から補足を加えてみる。^⑫

本書の冒頭「石川別時講中辻本住持之事」によると、平野大念仏寺の上人の選出の際、選ばれなかった別時の選出者は、各別時に戻り「銘々の辻本持之ヲ」と記している。

ちなみに第八世修観興善（生国者摂州住吉郡喜連村庄）^⑬大阪府平野区喜連）選出時、石川別時の候補は、佐備村（大阪府富田林市佐備）に在住していた道清であった。道清は、上人に選出されなかったため石川別時辻本を「居宅ニ而持」っている。

道清以降、二十代に渡る住持は、鬩で選ばれた人物が相承しており、挽道場が行われた。天文年間（一五三二～五四）大ヶ塚村に道場が完成すると、天文二十二年（一五五三）までは永珍（高野山にて出家）が、永禄元年

(一五五八)までは三篇(金剛山僧侶)が、永祿四年(一五六一)までは祐法(京都で修行)が新造道場の住持に就任している。

しかし、同時期の天文十四年(一五四五)から永祿四年まで、在所である中村を辻本とした道号が、第二十二代住持に就任していたとの記事も見えるため、平野大念仏寺の事例からも、挽道場を行う一方で、仏事を勤修する看坊として、僧侶が新造道場に留め置かれていたと考えられる。

その後の九代間は、鬪で選ばれた人物が在所で、また、他村から呼び寄せた人物が大念仏道場で辻本を相承していた。正保三年(一六四五)に瓦葺きの本堂が再建すると、大念寺を辻本と定め、他村より招き入れた僧侶が看坊に就任、『大念仏寺四十五代記録^并末寺帳』によると、

河州石川郡大ヶ塚村、大念寺、六別時之内辻本也、住持二代以前迄者、講中御札持、唯今迄二代以来ハ看坊持、
当看坊文貞、大念仏宗剃髮之清僧、四年以前^甲入院、但、再看坊也、此寺、從中興法明上人在之、但、挽道場ニ而者無之、

と見え、延宝五年当時では、平野庄出身の「大念仏宗剃髮之清僧」文貞が看坊を務めている。⁽¹³⁾

◇『融通大念仏龜鐘縁起』

近世前期には、平野大念仏寺の中興であり六別時を開いたとされる法明上人の伝記が数多く残っている。その中でも、平野大念仏寺に伝わる宝物龜鉦の靈験を描いた『融通大念仏龜鐘縁起』は、非常に興味深い縁起である。⁽¹⁴⁾

縁起においては、この鉦は良忍が鳥羽上皇から賜ったもので、良忍以後、「智者」達によつて相承されたが中絶した。その後、鉦は他の宝物とともに石清水八幡宮に保管されていたが、八幡大菩薩の神託により法明に受け継がれ、「大念仏宗」が再興された。また法明は加古の教信沙弥の夢告を受けたことより、その遺徳を訪ねることにし

たが、その道中で亀の奇瑞に遭遇した。以後、鉦は「亀鉦」と呼ばれるようになったと、鉦の由来を語っている。確認できる諸本の中でも最も古いものは、柏原市西光寺に所蔵されている縁起（以下『西光寺本』と略称）で、天文九年（一五四〇）の奥書を持つ。¹⁵

この『西光寺本』では、法明のことを「在家入道」と表記して、在俗の身ながら由緒ある鉦を伝授した「上人」と描き、

因みにこの鐘相伝の念仏の行者、末代大念仏の上人と号すへしとの勅定なり、依え當時に至るまで、代々参内におよばず、無智の在家入道を大念仏の上人と号するなり。（傍点筆者）
との一文を載せて、大念仏宗とは、「在家入道」の集団であることの由来を明らかにしている。

また、本縁起以外にも、法明を在俗の人物であると表現している書物があり、延宝九年（一六八一）林宗甫が著した『和州旧跡幽考』所収の「大念仏宗大和国之本寺」では、開山良忍上人を「顕密にやんごとなき人なり」と紹介する一方で、中興開基法明上人は「摂津の国深江村の俗」と記している。¹⁶

二 佐太来迎寺

来迎寺は、現在、大阪府守口市佐太中町、佐太神社の南に位置する浄土宗寺院であるが、宝永三年（一七〇六）の「来迎寺縁起」によると、「融通大念仏宗の本寺」と記している。¹⁷

◇石清水八幡宮と来迎寺

この『来迎寺縁起』によると、大安寺の僧行教は、宇佐八幡宮の託宣により石清水八幡宮を創建した時、合わせて感得した阿弥陀三尊を八幡大菩薩の「御本身」として崇め、新宮を造営したおりに宝殿深く納め奉った。時を経

て、摂津国深江の里に草庵を結んでいた「道心堅固の聖」法明は、僧形八幡大菩薩より「大念仏」を弘通せよとの夢告を受け、石清水八幡宮より「御本身の三尊」を拝受する。この後、阿弥陀三尊を相承した嫡弟誠阿が、法明の遺言に従い、河内国茨田郡に安置したのが、来迎寺の濫觴と伝えている。

◇上人の死去と挽道場

来迎寺では、延宝六年（一六七八）に上人の歴代と道場の移転を記した「当山従往古村々江 引移候旨」を大坂町奉行所に提出している。¹⁸

本書は、当時来迎寺の住持であった乾蓮社照阿慈光上人（第三十代）が著したもので、

河内国茨田郡拾七ヶ所、下之仁和寺庄守口村創建一字、号来迎寺、開山上人住持する事廿一年、貞治六年丁未九月十五日遷化、于今有旧跡、故に村里之人、指彼地来迎と云ふ、来迎寺をば後住益阿弥同郡西氷野村へ引移、と見えるように、茨田郡下仁和寺庄守口村に来迎寺を創建した開山上人実尊誠阿が、貞治六年（一三六七）に遷化した後は、益阿弥（益阿誠愚上人）が跡を継ぎ、来迎寺を守口村から西氷野村へ引き移したとある。

同文書によると、第二代益阿から第二十八代源阿良誉上人までは、平野大念仏寺と同様、上人が替わる度に来迎寺の寺地を上人の在所に移転（挽道場）している。正保三年（一六四六）に、一旦は梶村に寺地が固定するが、水害によって来迎寺は大破し、その後、慈光上人が、現在寺地のある佐太村に堂舎を新造する。

◇来迎寺の住持選出

来迎寺における住持選出については、交野市星田の慈光寺（元来迎寺末寺）に伝わる『来迎寺一件書』所収の「八幡相承大念仏宗歴代諸祖」が以下のように記述している。¹⁹

第二世益阿誠上人、床仲間持之最初へ從第二世至第二十九世、第二十九世光阿良慧上人、已上從第二世至第二十九世首尾二十八代之住持之義は、来迎寺直檀家之中、床仲間三十四軒之中より禪門に成り有之者、鬪次第に住持仕来なり、

第二世の益阿誠愚上人から第二十九世光阿良慧上人までの住持は、来迎寺直檀家中より選ばれた「床仲間」三十四軒中の「禪門に成り有之者」から鬪によって決められていた。

正徳三年（一七一三）に著述された『和漢三才図絵』にも、来迎寺の住持は、近年、紫衣を許された僧侶が相続しているが、以前には「同門四別所之俗」が鬪を取り、俄に薙髮して、後住となったと記している。⁽²⁰⁾

◇住持請待と法式の改革

慈光以降の上人選出は、第三十一代来迎寺住持を相承した慈眼上人の日記中にある『和州秋篠寺出入覚』に記されている。⁽²¹⁾ 本文書は、貞享元年（一六八四）より、秋篠寺の寺内にある西迎寺を廻って、秋篠寺と秋篠本郷村、また佐太来迎寺が争論となった事件の顛末を克明に描いている。

本文書中、貞享二年（一六八五）六月九日の口上書で、慈眼は、師である慈光を住持在職中に諸事法式を改め、諸堂を建立し、宗門の形成に尽力した僧侶と記している。

また、同月に寺社奉行に提出した目安では、西迎寺は来迎寺末寺で秋篠本郷村中の「菩提所」であると示した上で、第三条に、

中古より在家之禪門本寺之住持ニ罷成候故、宗門法式以下分明ニ不弁、次第ニ衰微仕候、就中、来迎寺儀宗為相續、師旦、心を合と知識持ニ仕候、然間、本来之諸式等、大概諸宗同時ニ相勤候処、加様之那魔出来仕、再宗旨之大破ニ罷成候段、迷惑ニ奉存候御事、

と見え、中古より在家禪門が本寺の住持に就任していたところ、仏事等が行えないため、宗門が次第に衰退した。来迎寺では、宗を存続するために「且」信徒と心を合わせて住持を「知識」へと改革し、今では法式など他宗と同じように勤修している。だから、このような問題があると、宗旨が再び破綻しかねないと主張した。同年八月七日には、この慈眼の意見が聞き届けられ、西迎寺を来迎寺の末寺とし、住持は本寺一任との裁許が申し渡される。

このように、来迎寺では、慈眼の師である慈光の代に住持が僧侶へと変革した。時代は下がるが、寛政三年（一七九二）大坂町奉行所に提出した「差上申一札」第二条目にも、

来迎寺住持歴代之内、慈光以来は、当表御役所^江相届候上、浄土宗之住持を致請待、諸事法式以下をも相改、古法を以邪正を糺候段、其節寺社奉行所^江差出候口上書に申立候始末、慈眼日記にも有之、右日記同人手扣とは乍申、書面之内に当表御役所^江も断出候趣等は、御役所旧記に致符合、

慈光以来、浄土宗の住持を請待して、法式等を改めたとあり、この一件は、『慈眼日記』所収の口上書（『和州秋篠寺出入覚』貞享二年六月九日の文書）にも見え、来迎寺側が大坂町奉行所に提出した文書も「御役所旧記」で確認できると記述している。⁽²⁾

三 浜村源光寺

源光寺は、大阪市北区豊崎にある浄土宗の寺院で、行基が開創した平生寺がその濫觴と伝えていて、天和三年（一六八三）、当時「無住無本寺」であった「中嶋大念仏宗」源光寺は、宗門改めの際、由緒に不審があるときれ、源光寺の由緒（「中嶋大念仏宗由緒書之覚」）や上人の系譜（「上人名帳相残り之分」）と什物の詳細が著述された『摂州西成郡南中嶋融通念仏宗由緒書』を大坂町奉行所へ提出する。⁽²³⁾

◇中嶋大念仏宗と源光寺

「中嶋大念仏宗由緒書之覚」によると、源光寺は、百九十年前の明応年中（一四九二〜一五〇一）まで富島庄三昧院と呼ばれ、「本尊」は、中興開山法明上人より相続し、中嶋大念仏宗の門徒達によつて守られていたと記している。

この中嶋大念仏宗も平野大念仏寺や佐太来迎寺と同様、上人を在俗の人物より選出しており、

年五拾以上之者節目をたたし、本尊之前二而御籤次第、其座落髮法体仕、富島之庄三昧院と申候由二御座候、然処二百式拾年以來ハ、本尊前二而御籤次第二落髮法体仕候得者、其在所江引越、大念仏寺と申、それハ源光寺ハ上人隨身講坊と申、相わかり申候、

三昧院に住していた上人は、年齢五十歳以上の門徒中から、本尊前の「御籤次第」によつて選出された人物が、その座から落髮法体となり就任していた。しかし、寺号を改めた後、百二十年前の永禄年中（一五五八〜七〇）よりは、籤で選ばれた人物は、源光寺に住するのではなく、自分の在所に道場を引き移しており、その道場を「大念仏寺」と称し、これにより源光寺を「上人隨身講坊」と定めたと記している。

ちなみに、本由緒書の中には、「大念仏寺」が中嶋大念仏宗の「本寺」であると記す一文もあり、

中嶋大念仏宗上人ハ、往古ハ天台衣・五条色袈裟^ニ御座候、看坊ハ浄土衣^ニ御座候御事、

との記述からは、天台衣の上人とは別に、浄土衣を着した看坊の存在が明らかにできる。

なお、中嶋大念仏宗では、門徒達によつて別時融通大念仏が執行されていて、天和三年には、毎月十四日に勤めている。この法会以外にも、天正年中（一五七三〜九二）まで、富島庄名主の支配のもと、春秋の彼岸に「城州嵯峨大念仏寺」より金普長老などの僧侶を請待して七日説法を修しており、明応年中からは千部経購読を勤修している。また、彼岸中日には、中嶋大念仏宗上人が四天王寺へ出仕し、「平野大念仏上人」と踊躍念仏を行っており、

毎年二月には、吉野金峯山寺藏王堂で行われる法会にも参加している。⁽²⁴⁾

◇「大念仏寺」上人と寺地移転

「上人名帳相残り之分」は、永禄年中から八代に渡る上人の相承と「大念仏寺」の寺地移転が描いており、

一、永禄年中浦江村教真上人

此時分之寄進状迄通相残申候外、上人在世并死去年数名帳等、此上人之跡家筋絶申候^付、相知れ不申候、但申伝^ニ教真上人とたへ之分、源光寺^ニ講坊上人代相勤候由、天正二年より以来者相知れ申候、

と見えるように、中嶋大念仏宗の大念仏寺初代上人には、浦江村の教真が就任しており、この上人の死去後、相承が途絶えたため、源光寺に住する講坊が上人代を勤めたとある。

天正二年（一五七四）には、道通が上人を相承し、寺地は上人在所である三番村に移転した。天正七年（一五七九）に道通上人が死去した後は、上人代をはさみ、文禄二年（一五九二）に北野村円寿が上人を相承、

六年上人持、慶長二乙亥五月廿五日死去、浦江村へ渡ス、

と見えるように、六年間上人を持った円寿が死去すると、大念仏寺は浦江村の道明上人在所へと引き渡した。以後、天満宮前（慶長四年）^(五九四) ↓浦江村（元和五年）^(六一九) ↓三番村（寛永四年）^(六二七) と挽道場を行っている。

寛永十二年（一六三五）に北野村の円清が相統するが、慶安元年（一六四八）の死去にともない、上人はまたも途絶え、『摂州西成郡南中嶋融通念仏宗由緒書』が記述された天和三年では、「看坊二者、浄土宗之僧慥成を抱置」

また「講坊を上人代と仕、慥成浄土宗之僧抱置」とあるように、上人代の講坊（＝看坊）に浄土宗の確かなる僧侶を抱え置き、仏事が勤められていた。⁽²⁵⁾ 本節冒頭で記した「無住無本寺」とは、このような上人の中絶によって「大念仏寺」が存在しない状況のことを指しており、「中嶋大念仏宗由緒書之覚」には、上人中絶の原因として「近年

門徒困窮仕、又ハヘリ申ニ付」と記述している。

この頃の中嶋大念仏宗別時門徒中で「上人持候家筋」の者は、北野村九名・浜村八名・光立寺村六名・浦江村四名・三番村三名の計五ヶ村三十名であり、「中嶋大念仏宗由緒書之覚」奥書には、全員の署名と判形が添付されている。

『源光寺文書』では、北野村円清上人以後の「大念仏寺」の上人相承について、明確にすることは出来ない。しかし元禄五年（一六九二）の文書において、源光寺の著名が「大念仏宗本山三昧院源光寺」となっており、少なくともこの頃にはすでに、中嶋大念仏宗の本寺であつた大念仏寺は廃絶しているものと考えられる。⁽²⁶⁾

◇源光寺の住持相承

「御公用留牒」は、元禄十一年（一六九八）から延享元年（一七四四）までの公儀と取り交わされた文書群をまとめたもので、源光寺住持の隠居願いなどを所収している。⁽²⁷⁾

本文書によると、源光寺住持は、元禄十六年（一七〇三）に檀誉の隠居にともない歆空が、宝永五年（一七〇八）には歆空弟子の廣空が相承している。この後、晝誉なる人物が住持を継ぎ、進誉（正徳三年⁽¹⁷¹³⁾）から巻誉（享保十二年⁽¹⁷²⁷⁾）へと弟子相承していく。

天明二年（一七八二）の「源光寺代々住持規約」によると、進誉からの源光寺住持は、

真宗浄土鎮西正統僧侶、代々豊後国佐伯出生の僧、法縁之内、如法篤実出世器量之長老を相撰、後住職ニ可相定事ニ候、

と見えることより、代々浄土宗鎮西派の正統な僧侶で、豊後国佐伯出生の僧の法縁の内、特に如法篤実な器量のある長老僧を選び、後住を相続させていたことがわかる。

これは、進誓が住持に就任した際、荒れ果てていた源光寺を、進誓の俗縁で豊後佐伯に住していた成松治兵衛が復興に援助したことによるものであり、進誓以後の奥書の署名は、それまでの「(大念仏宗) 浜村本光源光寺」から「浄土大念仏宗本光源光寺」に変化している。⁽²⁸⁾

第二章 「融通念仏宗」の成立

一 大念仏寺住持と六別時

佐太来迎寺や浜村源光寺で見られた僧侶の介入は、幕府の宗門改めや寺請制度の実施にともない、僧侶の必要性が重要視されてきたためであると考えられる。平野大念仏寺でも同様に、他宗の僧侶と関係も持つてきた。これが六別時内で大きな軋轢を生むことになる。

◇平野大念仏寺と大原南之坊

年欠であるが寛文年間(一六六一〜七二)制作と見られる「大念仏寺由緒覚書」によると、三十五代目の上人良故法善の死後、下・八尾別時が大原南之坊と結託して、鬭による上人の選出を行わず、護摩の奇瑞によって第三十六世を良説道和に決めてしまうという問題が起きる。⁽²⁹⁾

これに対して他の四別時より大きな反発があり、一旦は前の通りに鬭で選び出すこととなるが、良月清雲(第四十一世)の在任期には、

八尾別時・石川別時・高安別時衆中大原南坊与同心いたし、当寺は大原南坊ノ末寺と申、則上人を大原ノ可居置候ト申、

と見えるように、八尾・石川・高安別時が平野大念仏寺を大原南之坊の末寺と称して、上人の大原よりの選出を主張する事件へと発展する。

本争論は幕府の裁許を仰ぐこととなり、第四十三世良惠舜空上人代の寛文元年（二六六一）、寺社奉行は、大原南之坊と平野大念仏寺へ次ぎのような裁定を下した。^⑩

一 融通念仏者、南之坊開山良忍上人と相始候段、無紛候、雖然中絶之處、法明上人再興、住大念仏寺、至今相統之上者、六別時弥以大念仏寺為本寺、万事可相守先規事、

一大念仏寺宗門修行、天台宗と為格別之条、不可為末寺、雖然良忍相伝之流候之間、大念仏寺住持替候節者、

南之坊^江使僧を遣シ、其南之坊よりも使僧を差遣し、互ニ可相通事、

第一条目には、融通念仏は南之坊を開山した良忍上人の始めたものであるが、中絶した、その融通念仏を再興したのが法明上人であり、上人は大念仏寺に住み、今に相統されているので、六別時は大念仏寺を本寺とすべきである、第二条目には、大念仏寺の宗門修行は、天台宗とは異なるので末寺ではない、とはいえ、良忍相伝の流であるため、「大念仏寺住持」の交代の際には、南之坊へ使僧を遣わし、それに答えて南之坊からも使僧を遣わして、互いの交流を深めるべきである、と以上のように定めている。

◇六別時と「宗門規録」

南之坊との裁許後、浄土宗の僧侶が大念仏寺の仏事を勤修するようになった。延宝五年（一六七七）には『大念仏寺四十五代記録^并末寺帳』が制作され、同七年には六別時において「宗門規録」が制定された。^⑪このような経過をたどつて、これまで異論があつた規式が各別時の合意のもとに、古法に照らし合わせて一宗の規式として整備されたのである。

本規式には、七条目からなる法式がまとめられており、第一条、「融通大念仏宗」の衣体について、修多羅（袈裟の背後に垂らす組み紐）を付けること、第二条、良忍と法明の忌日にあたる一日と十三日の六時勤行は、大鉦を一挺、小鉦を人数分用いて勤めること、第四条、葬礼時は鉦・鉞・磬鉦を使い、「大念仏之教化、阿弥陀經^并教化之讚」を法要すること、第七条、四季念仏・施餓鬼の際、「辻本之住持」は相違なく参会し、法要を懇ろに勤めること、などを条規している。

◇大念仏寺上人の法衣

規式制定後にも、別時の間に問題が起きた。浄土僧介入の影響か、「大念仏寺上人」の法衣を、覚意良観（第四十五世上人）は天台衣、下別時法明寺・錦部別時古野村二郎兵衛は廬山衣であると主張したのである。

この事件も幕府寺社奉行の裁定を仰ぐこととなり、天和二年（一六八七）に下された裁許状の第一条によると、

一大念仏寺上人袈裟之儀、或天台衣、或廬山衣之由、双方申分証拠不慥、然処上人良観差出之画像、元和四年上人道和賛語有之^而為天台衣、其上縁起^三所載之画像、是又天台衣たる之条、向後可着天台衣、但宗門修行者、天台宗と格別之旨、寛文元年先奉行証文出置之間、弥可為其通事、

と見え、寺社奉行は、良観上人の提示した「上人道和賛語」や「縁起^三所載之画像」が天台衣であるとし、廬山衣（浄土宗）を否定、上人の袈裟は天台衣着用と定め、また、改めて天台宗とは宗門修行が異なることを明記した。⁽²⁸⁾

第二条では、大念仏寺内の諸事法式に関して、六別時はそれを妨げず、本末の礼儀を乱さないことが申し渡され、第三条には、

一上人着紫衣事、来由不分明間、可致無用、但為一宗之本寺之条、向後可着色衣事、

との規定があり、上人の着衣については、由来が明らかではないため、紫衣を禁止し、色衣の着用を定めている。

二 大念仏宗から融通念仏宗へ

貞享三年（一六八六）に平野大念仏寺の第四十五世上人であつた良観が死去し、住持選出が必要となる中、八尾別時辻本良明寺の融観大通は、在家禪門によつて行われていた住持選出の改変を企てた。

◇融観大通の改革

貞享四年、奉行所に提出した「願状」には、第二条にて、天和二年に禁止された紫衣の着用許可を請うと共に、第一条で次のように記している。³³

一 摂州平野融通念仏宗本山大念仏寺住持之儀、往古者弟子持て数代相統仕候処、中古に在家禪門札入持罷
成候、生得無智無能ニ御座候得者、一宗之法式不存候故、宗門次第衰微仕候に付、檀方本寺を見限り、
端々改宗仕者有之候、此躰ニ御座候得者、我宗断滅可仕様ニ奉存候、諸末寺并諸旦那共愁歎仕候、就夫、今
度八尾別時辻本良明寺大通願ひ如被申、恐多儀ニ御座候得共、高位之御方歟、又者智道兼備之知識歟、何れ
ニても從御公儀様本寺住持被為仰付被下候ハ、難有奉存候、

「融通念仏宗」の本山である大念仏寺住持について、良忍以降、第六世護阿良鎮までの知識よる弟子相承から、
法明再興後の在家禪門の鬭による住持選出へと移行したことによつて、法式を知らない無智無能の「在家禪門」が
住持に選ばれ、そのことが教団崩壊に繋がると主張した。そして、その打開策として、幕府が推挙した「高位之御
方」か「智道兼備之知識」が住持に就任することを望んだのである。

しかし、江戸寺社奉行は、貞享五年（一六八八）七月十八日付の「融通派六別時江申渡覚之写」第一条によると、
融通大念仏寺、從開山良忍、五六代迄者知識持候処、中興在家鬭取て住持相立儀、法儀不宜事候得共、先如

前々可為致住持事、

と見えるように、融通大念仏寺の住持は、開山良忍より五・六代まで「知識持」であつたところ、中興より鬪取りにて住持を決めていた。これは法儀として宜しくないが、まずは前々のように鬪で住持を決めることと定めた。^③

この第一条を受けて、第二条では六別時講中が私なく相談し「融通の一派の法儀」を立てるように命じ、第三条において、

一派中之内、從若年為致剃髮、學問執行為仕、法臘次第致六別時本寺無住持者、住持為勤可然事、

と述べ、六別時の内で若年のものを剃髮させ、修学を行い、僧侶となつた後は、修業年数により「六別時本寺」が無住のとき住持とすることを言い渡している。

◇融通一宗の法式

貞享四年七月二十七日、幕府寺社奉行より「融通一宗の法式」が承認され、六別時に申し渡された。^④それによると、第一条目に「当一代は、禪門札持の儀」、第二条に「今時より、若年の者、學問いたさせ、二代目よりこのもの住持といたし、知識にて相続の儀」と定め、次代住持は在家禪門から、次々代住持は學問修行を積んだ僧侶から選出することが決められた。

合わせて同文書には、六別時が和融の上で、幕府に願ひ出た書付も添えられており、その中には、

本山為住持代、智道兼備之知識、請待仕、僧房之致棟梁、則從六別時若年之者一人宛撰出し、是以於如来前御鬪を取り、則揚_リ候者_ハ壱人後住_ニ定、随分勵學問、若不器量にて破戒、或ハ不學_ニ候者即時_ニ為致退院、又可然者後住_ニ相窮_メ申度候御事、

との記載があり、他宗より智道兼備の知識を本山の住持代として僧房の棟梁に招聘し、六別時より若年の者を一名

ずつ選出し、この六名によつて如来前で鬪を取り、一人を後住と決める。後住は、住持代のもとで学問修業に励むこと、もしその人物が後住に相応しくないならば、即時に退院させ、新たに選出することが、六別時の間で一致した。

この他にも、「融通一宗之学問、末寺又末寺迄各入集本山修学相励、一宗之知識と成リ申候様、奉願申候御事」とあるように、末寺から本山へ集められた人材に学問修業をさせ、「一宗之知識」つまり宗侶として育成することや二月一日の開山良忍上人・六月十三日の中興法明上人の御忌法事には七日以前より、諸末寺は本寺に毎年出仕すること、「融通念仏六字詰め（南無阿弥陀仏）、如法に唱え修業すること」、「阿弥陀経」・『法華経』・『梵網経』・「六時礼讃」を誦誦することが「融通一宗の法式」として取り決められ、何れも幕府に認められた。但し、二鷹（説法勸化役）を役者貞松院に定めることは許可するが、多くの説法僧を抱え、在所にて弘通することについては、寺社奉行より「可致無用事」という付紙がされている。

◇紫衣勸許と六別時

この後、大通は幕府承認の法式の通りに、鬪によつて第四十六世住持を継承した。元禄七年（一六九四）紫衣が勸許されると大通は、早くも次代上人について、六別時に相談していて、同年には丹南（十ヶ郷）別時から以下のような返答書が大通宛に提出されている。

上人御願之紫衣、首尾能勸許有之、其上参内迄相済候事、宗門末代大慶不過之候、然ル処只今御病身ニ付、後住之義、御定被成度ニて、此方別時講中へも御相談被遊候得共、本山之後住職、可相勤望之者耆人も無御座候、兎角宗門後々之繁昌奉願間、如何様共上人之御存念ニ任セ申候間、御江戸へ被仰上、可然後住御定可被下候、後々ニ異儀申上間敷候、為後日、仍^而一札如件、

丹南別時では、上人の紫衣勅許を祝うと共に、当別時講の中には、本山の後住を勤める器量のものがないとして、宗門益々の発展を願い次代住持については大通に一任し、異議を申し立てない旨の一札を入れている。

同内容の文書が、八尾・高安・石川・錦部別時より大通へ出されたのだが、下別時だけは、最後まで在家禪門からの住持選出を主張した。³⁶ 大通が北花田村次郎兵衛に送った書状によると、江戸寺社奉行まで争論が及んだと記している。³⁷ しかし、元禄十年（一六九七）には、大通の意向に恭順する書状を提出したことで、在家集団としての「大念仏宗」は姿を消すこととなった。

◇「融通念仏宗」教団の整備

大通は、紫衣の着用許可を得るため元禄六年（一六九三）に「奉願二付由緒書之覚」を作成した。当文書では、『融通念仏縁起』の良忍と鳥羽上皇の関係を引用し、鳥羽院より勅免された紫衣は、「不器量」ゆえに着用が禁止される覚意良観（天和二年）までの五百七十余年の間、断絶なく着用していたと主張している。³⁸

また、本由緒書では、宗名を「融通念仏宗」と公式に規定し、良忍を「元祖」として位置づけ、大原での融通念仏感得が宗門開発の濫觴であると述べている。

大通は『融通大念仏亀鐘縁起』にも手を加えた。元禄八年に描かれた平野大念仏寺所蔵の縁起（『大念仏寺本』では、『西光寺本』において「在家入道」と表現していた法明を、「無智入道」に書き換えている。

これによって、法明は、「在家入道」という特殊な存在から僧侶へと変容させており、法明以後の上人についても、「依之当時に至るまで、代々参内に不及、無智の在家入道を、大念仏の上人と号するなり」（傍点筆者）の部分削除として、亀鉦は、良忍から僧侶達によって相承されてきたかのように主張している。³⁹

このように、宗門の正当性を作り上げ、自身も紫衣を賜ることによって僧侶として認められた大通は、「融通念

仏宗」をより強固なものへと形成するために、香衣の永宣旨を願ひ出る。元禄九年に宗侶育成機関である檀林の開發が勅許されると、大通は、融通念仏宗の宗義・法門を解説した『融通円門章』一卷を元禄十六年（一七〇三）に刊行し、『融通念仏信解章』二巻を宝永二年（一七〇五）に撰述、以後、他宗の僧侶に頼らない自主的な寺院組織を構築していくのである。

おわりに

以上、本稿においては二章にわたって、戦国期に摂津・河内地方に存在した大念宗の講集団の組織と運営、その後の展開について考察した次第である。

すなわち、第一章の上人と挽道場では、（一）平野大念仏寺における、開山良忍上人と中興法明上人の相承、大念仏上人の選出と浄土宗長老の招待について。また挽道場と六別時辻本、石川別時の運営、それに『融通大念仏龜鐘縁起』について検討した。（二）佐太来迎寺については、石清水八幡大菩薩の法明への夢告、上人の死去と挽道場、来迎寺の住持選出法、住持請待と法式の改革について明らかにした。さらに（三）浜村源光寺では、中嶋大念仏宗と源光寺、「大念仏寺」上人と寺地移転、源光寺の住持相承について考察した。

第二章「融通念仏宗」の成立では、（一）平野大念仏寺住持選出と六別時、また大原南之坊との関係、六別時と「宗門規録」、大念仏寺上人の法衣の争論について考察した。さらに（二）「融通念仏宗」としての教団化について、融観大通の改革をとおして融通一宗の法式、紫衣勅許と六別時の動向、「融通念仏宗」教団の整備の経過を明らかにした。

註

- （1）『私心記』（『石山本願寺日記』下、清文堂、一九六六）（2）年復刻）、『舜旧記』第三（『史料纂集』、一九七六年）。本稿と関連する先考研究は、平祐史・西本幸嗣編『摂

津国南浜村 源光寺文書（佛敎大学文学部史学科平祐史研究室、二〇〇二年）、『新修大阪市史』第二卷（一九八八年）、塩野芳夫『近世畿内の社会と仏敎』（和泉書院、一九九五年）、大澤研一『融通念仏宗成立過程の研究における一視点―『融通念仏寺記録抜書』の紹介を通して―』（『大阪市立博物館研究紀要』第二十八冊、一九九六年）、行昭一郎『大念仏宗寺院の近世的変容―河内本山来迎寺の場合―』（『奈良文化女子短期大学紀要』二十六号、一九九五年）がある。

(3) 『大念仏寺四十五代記録并末寺帳』（融通念仏宗敎学研究所編『融通念仏宗年表』大念佛寺、一九八二年）。

(4) 『大念仏寺四十五代記録并末寺帳』良忍上人の項。良忍は十二歳の時、比叡山で出家し、東塔常行堂で堂僧を務め、声明を学ぶ。二十三歳の頃、大原に隠棲し、阿弥陀如来より融通念仏を感得したと伝えられている。また、融通念仏とは、「一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、是名他力往生、十界一念、融通念仏、億百万遍、功德円満」の偈に基づき、自他の念仏が、互いに融通しあつて、功德を得るという敎えである。吉井良顕『融通念仏宗の敎義』（融通念仏宗敎学研究所編『良忍上人の研究』大念佛寺、一九八一年）。

(5) 『大念仏寺四十五代記録并末寺帳』法明上人の項。

(6) 詳しくは、大澤研一氏の『融通念仏宗の六別時について』（『大阪市立博物館 研究紀要』第二十四冊、一九九二年）参照。また、八尾市立歴史民俗資料館の平成十一年特別展図録『融通念仏行者 楽山上人と幕末の八尾』

において、各別時の末寺の分布が作図されていて便利である。

(7) 『大念仏寺四十五代記録并末寺帳』第四十三世良恵舜空の項。

(8) 『大念仏寺四十五代記録并末寺帳』第四十五世覚意良観の項。

(9) 『大念仏寺四十五代記録并末寺帳』第三十六世良説道和尚の項。

(10) 『大念仏寺四十五代記録并末寺帳』六別時の項。なお、石川別時については「挽道場二而者無之、但大ヶ塚村二寺地相定候」と記す。また、下別時法明寺・高安別時高安寺は挽道場である。

(11) 『大念仏寺四十五代記録并末寺帳』十ヶ郷別時の項。当別時の「檀那家」は千五百二十軒、「惣人数」は八千二百七十人であると記載する。

(12) 『紫雲山歴代録』（『法衣（御回在）の調査研究報告書』元興寺文化財研究所、一九八三年）は、寛政五年（一七九三年）に大念寺住職東英の命により、益田喜右衛門が当寺歴代の旧記を書写したものである。

(13) 『大念仏寺四十五代記録并末寺帳』「末寺帳」大念寺の項。

(14) 『融通大念仏亀鐘縁起』は、現在、大阪府柏原市国分の西光寺（『西光寺本』）・大阪府堺市の沢池利三文書（『沢池本』）・奈良市の徳融寺（『徳融寺本』）・平野大念仏寺（『大念仏寺本』）・浜村源光寺（『源光寺本』）・奈良県天理市蔵之庄町蔵福寺（『蔵福寺本』）に伝わる。法明

の伝記としては、「法明記」（『堺市史』続編四卷、一九七三年）、「河内国丹南郡来迎寺御本仏略縁起」（『摂陽奇観』卷之三十九、浪速叢書刊行会、一九二七年）、「法明上人由来」（融通念佛宗教学研究『融通念佛信仰の歴史と美術—資料編—』大念佛寺、一九九九年）がある。

横田兼章・戸田孝重「法明上人伝の研究」（融通念佛宗教学研究所編『法明上人六百五十回忌記念論文集』百華苑、一九九八年）、松浦清「融通念仏の三縁起絵巻」（『融通念佛信仰の歴史と美術—論考編—』東京美術、二〇〇〇年）参照。

(15) 西迎寺本（法会（御回在）調査研究報告書）所収）

には、天文九年（一五四〇）に施主である春誉なる尼が、父の三十三回忌追善のために、縁起を国分の大念仏道場へ寄進した旨の奥書がある。

(16) 『和州旧跡幽考』卷四所収「大念仏宗大和国之本寺」（大和名所記 奈良県史料第1巻）豊住書店、一九七七年。

(17) 「来迎寺縁起」（『守口市史』史料編、一九六二年）。

(18) 「当山從往古村々江引移候旨」（『守口市史』史料編、一九六二年）。来迎寺寺史は『守口市史』（本文編第一卷、一九六三年）参照。

(19) 「慈光寺文書」（『守口市史』本文編第一卷）。

(20) 「和漢三才図絵」卷七十五（東洋文庫本）。

(21) 「和州秋篠寺出入覚」の引用は、行昭一郎氏の『和州秋篠寺出入覚』について、貞享年中宗旨法出入顛末（『奈良文化女子短期大学紀要』二〇号、一九八九年）

による。

(22) 「差上申一札」（『守口市史』史料編）。江戸寺社奉行の裁許仰ぐ事件とは、当時無住であった来迎寺の後住を廻つて、来迎寺末寺檀中・清浄華院・平野大念仏寺・持明院の間で起きた争論のことである。

(23) 『摂州西成郡南中嶋融通念仏宗由緒書』（『摂津国南浜村 源光寺文書』所収）。源光寺の沿革は、西本幸嗣「源光寺の概要—源光寺文書の研究」（『摂津国南浜村 源光寺文書』所収）。

(24) 吉野藏王堂との関係については、「大念仏宗大和国之本寺」（『和州旧跡幽考』卷四所収）参照。

(25) 奥書に「看坊 快益」と署名されているため、快益が「慥成浄土宗之僧侶」である。

(26) 「摂州西成郡南浜村寺社吟味帳」（『摂津国南浜村 源光寺文書』所収）。本文書には、教真上人より円清上人までの大念仏寺に住した上人が、源光寺住持として列挙されており、その後の住持として、実道・洗益・観誉・證

誉・正誉・天誉（元禄五年当住）の名が見える。ちなみに、円清上人以降の住持には、「上人」号の記載はない。

(27) 「御公用留牒」（『摂津国南浜村 源光寺文書』所収）。

(28) 「摂州西成郡南浜村源光寺規約」（『摂津国南浜村 源光寺文書』所収）の享保七年（一七二二）「寺代々譲証文之事」参照。本文書は、享保十二年（一七二七）に進

普隱居によつて住持を相続する巻書をはじめとした源光寺代々の住持に向けて記された文書であり、奥書には、現住である進誉と成松治兵衛、それに復興の際、成松同

様に進言に援助を行った石崎清左衛門の三人が署名印押している。これを受けて作成されたのが前述した天明二年「源光寺代々住持規約」である。巻首より四代後の住持戒誓が記したものである（同上書所収）。

- (29) 「大念仏寺由緒覚書」 沢池利三文書（『堺市史』続編第四卷、一九七三年）。

- (30) 大澤氏前掲論文（註（2））に翻刻紹介の「融通大念仏寺記録抜書」所収「融通大念仏宗本山四十三世舜空上人代御裁判書之写」。舜空期の本末関係については、同氏「近世融通念佛宗における舜空期の意義」（融通念佛宗教学研究所編『融通念佛信仰の歴史と美術』論考編一）東京美術、二〇〇〇年）がある。

- (31) 「宗門規縁」（『松原市史』第五卷、一九七六年）。

- (32) 「天台衣廬山衣着用訴論之事紀明之上申渡之覚」（『融通大念仏寺記録抜書』所収）。

- (33) 「乍恐願狀」（『融通大念仏寺記録抜書』所収）。

- (34) 「融通派六別時江申渡覚之写」（『融通大念仏寺記録抜書』所収）。

- (35) 「今度被為仰付候趣」（『融通大念仏寺記録抜書』所収）。

- (36) 「奉差上一札之事」（『融通大念仏寺記録抜書』所収）。

本文書は七月二十一日付で提出である。同日には、八尾別時と錦部別時（無住のため講中一同から）、同月二十三日には高安・石川別時が大通に提出している。高安・錦部・八尾別時の文書には、「上人宗門再興之御願望、諸事首尾克相叶、一派之僧俗大慶不過之候」（八尾別時

「口上」『融通大念仏寺記録抜書』所収）と宗門再興を喜ぶ一文も見られる。

- (37) 「大通書狀」 沢池利三文書（『堺市史』続編第四卷、一九七三年）には、

御条目二、不存一宗之法式ヲ僧侶、不可寺院住持事と御座候、法明寺良覚等がごときの文盲愚癡にて、札入之住持望候義、先ツ御条目二違背仕候間、弥々古法之知識持せ奉冀候、

と見えるように、下別時辻本良明寺の良覚が、「札入之住持」を望んだのに対して、大通は、良覚を一宗の法式を知らない文盲愚癡の僧と非難している。年代が記されていないが、紫衣勅許の問題を取り上げているので、元禄七年以前に大通が記したものであろう。

- (38) 「奉願二付由緒書之覚」（『融通大念仏寺記録抜書』所収）。

- (39) 「大念仏寺本」（『融通念佛信仰の歴史と美術—資料編—』所収）には、詞書を近衛植家（永禄九年没）とする元禄八年の近衛家熙の奥書がある。しかし、本論で示したように、内容より元禄年間に描かれた縁起であると見るのが妥当である。

また、元禄三年（一六九〇）に描かれた『源光寺本』（摂津国南浜村 源光寺文書 所収）では、当寺の本尊である「天筆如来」の由緒についても合わせて語られているが、「依之當時に至るまで、代々参内に不及、無智の在家入道を大念仏の上人と号するなり」の部分で「依之當時に至るまで、代々参内に不及、無智の入道を

大念仏の上人と号するなり」(傍点筆者)と書き改めている。また、『源光寺本』には、「在家入道」という記述は見あたらない。

(40) 「勅許檀林永宣旨」(『融通総本山大念佛寺誌』大念佛寺、一九〇四年、一九九〇年復刊)。

摂州住吉郡平野莊大念佛寺者、融通念佛中興之道場也、都鄙末寺之僧学臘成滿之輩、以本寺之選、可令申香衣者、依天氣執達如件、

(六九六)
元禄九年九月十六日 右中弁_{在判}

住持大通上人御房

